

# 文献案内

伊東祐子校訂・訳注『中世王朝物語全集 二二 物語絵巻集』（笠間書院、二〇一九年六月）

王朝物語文学への憧憬を基盤に院政期以降成立した擬古物語—もつともこうしたイメージを刷新すべく企画された全集である—とされる作品のうち、絵巻として現存する六本の注釈書。伊東氏が復元・紹介に寄与し、単著にまとめられた『藤の衣物語絵巻』（遊女物語絵巻）が一冊の半分を占める。近年、より原本に近い白描絵巻の出現した『下燃物語絵巻』の初めての本格的な注釈がこれに続く（模本が影印で紹介され翻刻もあり）。そして美術史研究でもよく知られている作品から、『豊明絵巻』『なよ竹物語絵巻』『掃墨物語絵巻』『葉月物語絵巻』を収める。

読みやすく整えられた校訂本文を上段に、口語訳を下段に配した後、校訂上ないし語釈などの注、梗概と絵の説明、解題と参考文献を加える。物語を辿るのに梗概は有難く、国文学側からの研究史整理は物語作品としての理解の導きとなる。絵は図版に収める場面が少なく、歯がゆい。ただ多くの画面詞を伴う『藤の衣』は伊東氏の単著があり、『豊明』以下は参照に困らない。『下燃物語絵巻』は別途企画されると思うが、『思文閣古書資料目録』一九七二（二〇〇六年）に絵の全六段のうち五段をカラーで掲載する（甲子園学院現蔵）。物語本文に沿って、画面を言語化したことに意義がある。注や解題では、時おり校訂者の踏み込んだ解釈も示され、精読されることよって議論が深まる。月報は池田忍「物語批評としての絵と画中詞—藤の衣物語絵巻」に寄せて—で、火桶に注目し中世的「家」との脈絡から解釈を施す。

中世白描物語絵巻の成立・享受には女性読者が深く関わっていたことが指摘されているが、白描源氏絵や『平家公達草紙』『新蔵人』『ちごいま』等を含め、国文学系の女性研究者達を中心とした新しい試みが続く。これが現行の学術体系を刷新する動きとなるのか、サブジャンルとしての固定化に作用するのか、注視している。本書のような書籍で中世史研究者も若い時に目を通す対象に加われれば、また将来の展開の可能性もあるだろう。（藤原重雄）

泉万里「江戸時代の高野山図屏風（堺市博物館蔵）について」（『大和文華』第一三四号、二〇一九年三月）

標題作品の景観年代については、張洋一「当館蔵 高野山図屏風について」（『堺市博物館報』一八、一九九九年）が金堂裏手の礎石群を六角経蔵跡と比定し、十九世紀前半とする説を示した。以降はこれが踏襲されてきたが、本論文では、『紀伊統風土記』や『高野山古絵図集成』（日野西眞定編、清栄社、一九八三年）により、礎石群は灌頂堂跡であると、景観を十八世紀半ばとする新見解を示す。併せて、張氏が検討課題として挙げた点についても回答を用意している。その過程で述べられる、高野山を描いた絵図類の概論と本図の位置づけにより、読者は高野山参詣の歴史を理解することが出来る。また、御廟橋の女性らしき人物描写を一例として、継承される絵画表現と聖域を描く意識に言及する。そうした一連の論証では、結論が出せない点についても丁寧な述べられており、必ずしも実景が描かれるわけではない画の中の、どこに着目すれば往時の風景や制作の意図に迫ることが出来るのかという点について、学ぶことが多い。

景観からのアプローチに加え、絵画様式の上でも、当屏風の製作時期は十九世紀前半より遡るものであることを多くの具体例を挙げて示す。さらに、他作品にみえる描写の類似から、参詣・名所絵図の需要とそれに応ずる絵師の製作現場に向けられた著者の視点が必要である。旅文化と絵画、描く側・見る側における情報の共有といった多様な位相から対象とその背景を俯瞰する姿勢は、著者の豊富な経験に基づくものである。絵師・注文主・受容者に寄り添うことで広がる奥行についても気づかせてくれる。なお、著者の勤務先である大和文華館では特別展「聖域の美—中世寺社境内の風景—」（二〇一九年十月五日〜十一月十七日）が開催され、当屏風はもとより多種多様な寺社境内の画像史料が一堂に会した。同展図録には著者による「総論 中世寺社境内の風景」「付論 高野山の風景」も掲載されている。

（三島暁子）

日野綾子「太宰府天満宮境内絵図―九州歴史資料館・太宰府天満宮所蔵資料から―」(『九州歴史資料館研究論集』第四三号、二〇一八年三月)

近世から近代において、寺社に参詣した者が持ち帰った土産の一つに境内絵図がある。本論文は、九州歴史資料館と太宰府天満宮が所蔵する計二十種の太宰府天満宮の境内絵図について、その図版を提示しつつ、概要を紹介したものである。

まず、境内絵図を概観する。太宰府天満宮の境内絵図は、主に境内を画面中央に配置し、その周囲に門前町や周辺の名所旧跡が配されるという構図を持つ。江戸時代の制作分が六種、明治期の制作分が十四種確認できるとし、後者より前者の方が高い視点から境内を俯瞰する形となっているという。

次に境内絵図を三つにグループピングしつつ、個別の作例の紹介を行う。第一に、太宰府神社事務所から明治期に発行された七種で、明治二十五年(一八九二)のものが最も古い。第二に、暗香社(太宰府天満宮回廊の一角にあった土産物を扱う商店)から明治期に発行された二種で、一つは大坂市の人間が印刷者であったとする。第三に、文政二年(一八一九)に発行されたものを含む、上記に括られない十一種であり、それぞれに作成に関わった人物や図様が異なっている。

続いて、前述の第一グループの内、印刷者・代表者が共通する五点を取り上げ、その変遷を論じる。ほぼ同じ構図でも細部に差異が見られ、境内の変化が速やかに絵図に反映されていたことに触れた上で、これらの絵図が社務所による公式観光マップとしての意味を持ったのであろうと評価する。

最後に、これらの境内絵図が、境内の景観変遷の考察材料となりうることや、絵図作成に関わった下絵画家や印刷業者、当時の福岡県の寺社で制作されていた絵図の全体像を考える上で重要であることなどを確認している。

本論文は、境内絵図が宗教史・美術史研究に寄与する可能性を具体的かつ端的に示したものと考える。筆者が論文の末尾で予告している、当該の境内絵図に関するさらに詳細な分析を楽しみに待ちたい。(石津裕之)

佐藤秀彦「クリストファー・ドレッサーと正倉院宝物」、佐藤秀彦(監修・解題・註釈)・岸田陽子(翻訳・註釈)「クリストファー・ドレッサー著『日本―その建築、美術、工芸』第1章〜第2章」、同「同、第3章〜第5章」(『郡山市立美術館研究紀要』第5・8・9号、二〇〇七・一五・一八年三月)

明治初年に日本を訪れ、正倉院宝物を手に取り精査した英国人がいた。クリストファー・ドレッサーがその人で、ミントンやウエッジウッドなどの陶磁器の装飾図案も手がけたデザイナーである。彼が帰国後に執筆した『日本―その建築、美術、工芸』には、豊富なスケッチとともに日本滞在中の見聞が詳しく記録されている。表題論文はその見聞記の翻訳に註釈を加えたもの(未完)と、そこに記される正倉院宝物調査について論じたものである。

博物館創生期の日本で展示すべく、英国の博物館から産業工芸品が寄贈されることになった。その輸送と日本政府への引き渡しを託されたドレッサーは、明治九年末に横浜に到着するや、政府高官たちに国賓待遇で迎えられ、彼の知識や鑑識眼は高く評価され、内務卿の大久保利通は日本各地の手工業の視察を依頼し、外貨獲得のための助言を求めた。翌年正月、横浜から船で神戸に向かったドレッサーは、以後二カ月余りをかけて人力車で各地を巡り、陶磁器や和紙・漆などの産地を調査し、寺社や街中で歴史的な建築・意匠を発見することになる。

博物館長の町田久成の便宜により実現した、東大寺大仏殿における正倉院宝物の調査は特に印象的だったようで、詳細な記録が残されており、表題論文では具体的な宝物比定をおこなっている。ドレッサーの調査は明治天皇の宝物天覧の直前に行われていることから、著者は町田が宝物の美術的価値や原産国に関する情報を得ようとしたのではないかと推測する。実際、ドレッサーは見聞記の中で、日本人は宝物の産地を知らないとして、産地に関する自身の見解を披露しており、彼の助言が初期の宝物調査に与えた影響は考慮すべきであろう。見聞記には他にも、建築や風習、小規模産業の様子など、明治初期の様子が生き生きと描かれており、興味は尽きない。(稲田奈津子)